



Title	集団成員の制御焦点が集団討議における沈黙に与える影響
Author(s)	樽井, この美; 五十嵐, 祐
Citation	対人社会心理学研究. 2016, 16, p. 33-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57804
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

集団成員の制御焦点が集団討議における沈黙に与える影響

樽井 この美(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

五十嵐 祐(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

本研究は、集団討議場面において集団成員が問題解決に寄与する言動をしないことを沈黙として捉え、集団内での沈黙を抑制する要因について検討した。集団内の圧力への屈服、ネガティブなフィードバックへの恐れ、現状維持といった沈黙の要因は、制御焦点(Higgins, 1997)のうち予防焦点と関連すると考えられることから、本研究では、集団討議場面において、予防焦点の優勢な個人の発言時間が促進焦点の優勢な個人よりも短くなると予測し、隠れたプロフィール課題を用いて3名集団での集団討議実験を行った。分析の結果、制御焦点の操作によって発言時間に有意な差はみられなかった。その一方で、促進焦点が優勢となっている場合、特性的な予防焦点が発言と関連しており、特性的予防焦点と、促進焦点のプライミングの交互作用が発言に影響する可能性が示唆された。

キーワード: 沈黙、制御焦点、発言

問題

人は日常生活において、さまざまな意思決定を行っている。特に企業をはじめとする組織や集団では、複数人で話し合いをした上で意思決定を行う場合が多い。このような集団意思決定においては、集団成員のもつ意見や情報を共有することが求められるが、人は必ずしも自らのもつ意見や情報を集団内で共有しない。本研究では、集団成員が集団での問題解決に際して、共有すべき情報や意見をもつにもかかわらず、それを共有するための言動をしないことを沈黙(silence)と捉え、集団内での沈黙を抑制する要因について検討する。

一般的な対人コミュニケーションにおける沈黙には、コミュニケーション・スキルが関係している。コミュニケーション・スキルとは、言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力であり、藤本・大坊(2007a)では、外向性の高い人ほど表現力および自己主張の得点が高いことが示されている。このことから、意思決定場面における発言には、コミュニケーション・スキルとパーソナリティ特性が影響すると考えられる。

しかし、集団内での沈黙にはこれらの要因のみが強く影響しているわけではない。例えば、組織で下位に位置する従業員は、従業員による自由な意見の表明を経営者があまり望んでいないと考えている(Moskal, 1991)。また、自らの能力の低さが露呈するネガティブなフィードバック(Carver, Antonio, & Scheier, 1985)を受けることへの恐れも沈黙の要因として考えられる(Morrison & Milliken, 2000)。さらに、意見を表明することによって新たに不確実性や責任が生じることよりも、現状を維持する方が快適であるという、現状維持志向(Henriksen & Dayton, 2006)の影響も想定される。つまり、沈黙をする集団成員は、自らの安全を確保し、損失を回避するために行動し

ていると考えられる。このように、損失を避け、現状を維持しようとするあり方は、制御焦点理論(Higgins, 1997)によると、人々のもつ自己達成と安全確保の2つの目標のうち、後者に対する動機づけを高めている状態とみなすことができる。制御焦点理論では、自己制御の形態を促進焦点と予防焦点の2つに区別している。促進焦点の優勢な個人は、利益を獲得することを志向し、利益を見逃すことを回避しようとする。一方、予防焦点の優勢な個人は罰されないことを志向し、間違いを犯すことを回避しようとする。また、個人の制御焦点は実験操作によって誘導可能である(Freitas, Liberman, & Higgins, 2002; Molden & Higgins, 2004)。

先に述べたような、集団内の圧力への屈服、ネガティブなフィードバックへの恐れ、現状維持といった要因に基づく沈黙は、自らの安全を確保し、間違いを犯すことを避けようとすることで生じるものであり、集団成員の予防焦点が優勢となるときに、これらの要因に基づく沈黙が生じやすくなると考えられる。具体的には、予防焦点が活性化された集団成員は、発言することに防衛的になり、発言量が減少すると考えられる。その一方で、促進焦点が活性化された集団成員は、集団討議における正答や最善の回答に到達するために、発言量を増加させると考えられる。

そこで、本研究では、個人の制御焦点を操作することで、集団内での個人の沈黙の度合いが変化すると予測し、検討を行う。なお、制御焦点は操作によって変容させることができる一方、各個人の特性として扱うことも可能なため、個人特性としての制御焦点も測定し、沈黙との関連について検討する。さらに、制御焦点のほかにも、コミュニケーション・スキルとパーソナリティ特性をあわせて測定し、沈黙との関連を検討する。

また、集団討議場面での沈黙を扱うにあたり、本研究では集団内の少数派成員に着目する。意思決定場面においては、各成員のもつ意見を集約することが、最善の意思決定に到達するために合理的な方略であると考えられる。このことから、少数派成員が沈黙をすることは、結果として集団での問題解決に寄与しないこととなると考えられる。その一方で、対立意見や新たな意見を述べることは、集団内での孤立につながるといった懸念も生じさせる。この懸念は、特に自らが集団内で少数派となる場合に顕著であり、少数派成員は、集団内で自らの意見を発したがることも示されている(Phillips, 2003)。このことから、少数派成員の存在は集団討議において重要となる一方、こうした成員は特に沈黙をしやすい状況にあると考えられる。本研究の仮説は、以下のとおりである。

仮説: 集団討議場面で少数派となった場合、予防焦点の優勢な個人は、促進焦点の優勢な個人よりも、発言時間が短く、また集団内での発言割合も少なくなる。

方法

実験計画

少数派成員の割り当てられた制御焦点を独立変数、集団討議場面における個人の発言時間を従属変数とする、1要因2水準参加者間計画であった。集団は2名の多数派と1名の少数派の合計3名で構成された。成員の制御焦点は、多数派2名は常に促進焦点条件に、少数派1名は促進焦点か予防焦点のいずれかの条件に割り当てられた。そのため、集団成員の制御焦点の組み合わせは、(1)促進焦点3名条件、(2)促進焦点2名予防焦点1名条件の2パターンであった。

実験参加者

愛知県内の大学生60名(男性12名、女性48名、 $M_{age}=20.28$)が実験に参加した。各パターンには、3名×10集団=30名が割り当てられた。実験参加者は日本語を母語とするものであり、集団成員の性別はすべて同性であった。

制御焦点プライミング

集団成員の制御焦点を操作するため、迷路課題(Friedman & Förster, 2001)を実施した。実験参加者は、ジャングルを旅する冒険家として迷路を解いた。促進焦点プライミングでは、参加者は迷路のゴールにある肉を求めて迷路を解いた。一方、予防焦点プライミングでは、参加者は、迷路のスタート地点にいるライオンによる捕食を避ける目的で迷路を解いた。

促進焦点3名条件では、3名の参加者全員に促進焦点をプライミングした。一方、促進焦点2名予防焦点1名

条件では、多数派に割り当てられた2名に促進焦点、少数派に割り当てられた1名に予防焦点をプライミングした。そのため、促進焦点をプライミングされた参加者は、多数派成員40名と、促進焦点3名条件に割り当てられた少数派成員10名が混在していた。

集団討議課題

スポーツ店を経営する店舗を3つの候補から選択する、隠れたプロフィール課題を用いた(Greitemeyer et al., 2006)。各店舗の情報数をTable1に示す。各店舗には立地や設備などの情報が15個ずつあり、情報の種類はポジティブ情報、中立的情報、ネガティブ情報の3種類であった。店舗によって情報の比率は異なり、ポジティブ情報の最も多い店舗A(正答)が最も望ましく、店舗Cが2番目、店舗Bが3番目に望ましいとされた。

実施にあたっては、原著者から受け取ったドイツ語の情報マテリアルを和訳し、日本での文脈に沿うように一部変更をした上で、日本語版を作成した。その上で、和訳した情報マテリアルの情報価を確認するため、予備調査を行った。予備調査では10名の日本人大学生に質問紙を配布し、各情報から受ける印象を、1.「ネガティブ」～7.「ポジティブ」の7件法で測定した。得られたデータから各情報から受ける印象について平均値を算出した。その結果、平均値が4(中点)以下であった2つのポジティブな情報の表記を修正した。その他の情報の平均値は、ポジティブな情報は4.5より高く、中立的な情報は3から4.6、ネガティブな情報は3.5未満であった。このことから、日本語版に含まれる情報も、原版と同様の情報価をもつと判断した(Appendix)。

それぞれの参加者には、各店舗について15個中9個、計27個の情報が与えられた。多数派に割り当てられた2名は、すべての店舗について同一の情報を共有した。一方、少数派に割り当てられた1名は、すべての店舗について、多数派の2名と異なる情報を多く与えられた(Table2)。また、参加者に与える情報を操作することで、少数派のもつ情報を集団内で活用することが必要な状況を設定した。多数派に対しては、3番目に望ましい店舗Bが見かけ上は最も望ましくなるように情報が与えられ、少数派に対しては、最も望ましく正答である店舗Aが見かけ上も望ましくなるように分配された。

発言時間

集団討議の様子をデジタルビデオカメラで録画し、荒川・鈴木(2004)による量的分析ソフト sigsaji2 を用い、集団成員の発言時間をコーディングした。コーディングは参加者ごとに行われた。コーディングによって、各成員の発言時間、各集団の総発言時間および結論に至るまでの総討議時間に対する各成員の発言時間の割合を算出し、従属変数として用いた。

Table1 各店舗の情報数

	ポジティブ	中立的	ネガティブ
店舗A	9	3	3
店舗B	6	3	6
店舗C	6	6	3

Table2 多数派・少数派の参加者に与えられた情報数

	多数派a	多数派b	少数派c
店舗A			
ポジティブ	3	3	9
中立的	3	3	0
ネガティブ	3	3	0
店舗B			
ポジティブ	6	6	0
中立的	3	3	3
ネガティブ	0	0	6
店舗C			
ポジティブ	3	3	3
中立的	3	3	3
ネガティブ	3	3	3

測定変数

尾崎・唐沢(2011)による Promotion/prevention focus scale 邦訳版(以下、PPFS 邦訳版とする)を用いて、特性的制御焦点を測定した。PPFS 邦訳版は、利得接近尺度8項目と損失回避尺度8項目から構成される尺度であり、7件法で測定した。コミュニケーション・スキルは、藤本・大坊(2007a)による ENDCOREs のうち、表現力(「自分の考えを言葉でうまく表現する」など)4項目と自己主張(「まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする」など)4項目を抜粋し、7件法で測定した。さらに、パーソナリティ特性を、小塩・阿部・カトローニ(2012)による日本語版 TenItem Personality Inventory(TIPI-J)10項目を7件法で測定した。

取り組みのチェック

集団内の知り合いの有無(「今回の話し合いのメンバーの中に、あなたの知り合いはいましたか」)、課題に対する既有知識(「これまでに、今回の話し合いのテーマについて考えたことがありましたか」)、集団討議への取り組み(「あなたは、今回の話し合いに、どの程度積極的に参加しましたか」)を測定した。知り合いの有無についてのみ、「いた」と「いなかった」の2件法とし、他の2項目は1.「まったくない」～5.「非常にある」の5件法とした。

手続き

参加者は実験室に到着後、個別の机に着席した。はじめに特性的制御焦点の質問紙に回答した後、参加者は隠れたプロフィール課題に関する情報を受け取り、個人で店舗の選択を行った(7分間)。

次に、制御焦点のプライミングとして、迷路課題を行った(3分間)。

迷路課題の終了後、参加者は集団討議用の机に移動

し、対面で意思決定を行った。集団討議にあたっては、受け取った情報が他の人とは異なる可能性があること、最もふさわしい店舗は必ず一つに決まることを教示した。また、集団討議の結論は、全員一致で下すように求めた。集団討議の制限時間は20分であり、制限時間よりも早く集団での結論が出た場合は、その時点で討議終了とした。集団討議が終了した時点で、それぞれの参加者は、集団で下した結論(どの店舗を選択したか)を配布した回答用紙に記入した。

その後、回答者は個別の机に戻り、コミュニケーション・スキル、パーソナリティ特性、操作チェック項目に回答した。最後にデブリーフィングを行い、実験は終了した。

結果

記述統計量

条件別に、各成員の発言時間、各集団の総発言時間に対する各成員発言時間割合、結論に至るまでの各集団の総討議時間に対する各成員の発言時間割合の平均値を Table3 に示す。多数派に割り当てられた成員の発言時間について、促進焦点3名条件と促進焦点2名予防焦点1名条件の間で差がみられたかどうかを検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、いずれの変数についても、条件間で統計的に有意な差はみられなかった(発言時間: $t(38) = 1.03, p = .31$ 、各集団の総発言時間に対する各成員の発言時間の割合: $t(38) = 0.29, p = .77$ 、結論に至るまでの各集団の総討議時間に対する各成員の発言時間の割合: $t(38) = 1.00, p = .32$)。

隠れたプロフィール課題での正答率(店舗 A を選択した集団の割合)は、促進焦点3名条件において80%(8集団)、促進焦点2名予防焦点1名条件において70%(7集団)であった。また、集団内に知り合いを含む集団は、促進焦点3名条件において4集団、促進焦点2名予防焦点1名条件において1集団であった。促進焦点3名条件の1集団では、成員3名のうち1名のみが知り合いがいたと回答し、その他の4集団では成員3名のうち2名がお互いに知り合いがいたと回答した。集団成員のうち2名が知り合いであった集団では、知り合いであった2名は常に多数派に割り当てられていた。次に、集団成員の既有知識や、課題への取り組みについて、集団間で差があるかどうかを検討した。課題についての既有知識の平均値は、促進焦点3名条件において $M = 1.63$ 、促進焦点2名予防焦点1名条件において $M = 1.50$ であった。課題に対する取り組みは、促進焦点3名条件において $M = 3.97$ 、促進焦点2名予防焦点1名条件において $M = 3.93$ であった。取り組みのチェック項目について、促進焦点3名条件と促進焦点2名予防焦点1名条件の間で差がみられたかどうかを検討するため、対応のない

t 検定を行った。その結果、いずれについても条件間で統計的に有意な差はみられなかった(課題についての既有知識: $t(58) = 0.60, p = .55$ 、課題に対する取り組み: $t(58) = 0.15, p = .88$)。

Table3 各成員の発言時間,総発言時間に対する発言時間割合、総討議時間に対する発言時間割合の平均値 (SD)

		発言時間(秒)	発言時間割合 (対総発言時間)	発言時間割合 (対総討議時間)
促進3名	多数派 ($n = 20$)	214.7 (66.9)	32.3% (7.1%)	24.5% (5.8%)
	少数派 ($n = 10$)	243.0 (82.5)	35.4% (5.9%)	26.8% (4.9%)
促進2名	多数派 ($n = 20$)	192.6 (63.2)	33.0% (8.1%)	26.7% (8.2%)
	少数派 ($n = 10$)	207.6 (99.2)	34.0% (6.8%)	27.2% (7.9%)

少数派についての検討

少数派に割り当てられた成員の発言時間について、促進焦点3名条件と促進焦点2名予防焦点1名条件の間で差がみられたかどうかを検討するため、発言時間、および集団内での発言時間の割合を従属変数として、対応のない t 検定を行った。その結果、発言時間($t(18) = 0.83, p = .42$)、各集団の総発言時間に対する各成員の発言時間の割合($t(18) = 0.44, p = .67$)、結論に至るまでの各集団の総討議時間に対する各成員の発言時間の割合($t(18) = 0.16, p = .87$)のいずれについても、条件間で統計的に有意な差はみられなかった。

変数間相関

条件操作以外に、コミュニケーション・スキルやパーソナリティ特性が発言時間と関連するかどうかを検討するため、促進焦点3名条件(10集団)の少数派成員(促進焦点)、促進焦点2名予防焦点1名条件(10集団)の少数派成員(予防焦点)について、それぞれ変数間の相関係数を算出した。条件別に算出した相関係数を Table4 に、20集団全体についての相関係数を Table5 に示す。結果より、促進焦点3名条件では、特性的予防焦点と発言時間($r = .73, p = .02$)、各集団の総発言時間に対する各成員の発言時間の割合($r = .79, p = .01$)、結論に至るまでの各集団の総討議時間に対する各成員の発言時間の割合($r = .81, p < .01$)、経症傾向と発言時間($r = .77, p = .01$)、各集団の総発言時間に対する各成員の発言時間の割合($r = .81, p < .01$)、結論に至るまでの各集団の総討議時間に対する各成員の発言時間の割合($r = .67, p = .03$)に正の関連がみられた。一方、促進焦点2名予防焦点1名条件では、自己主張と結論に至るまでの各集団の総討議時間に対する各成員の発言時間の割合($r = .69, p = .03$)に正の関連がみられた。少数派全体では、勤勉性と発言時間($r = -.45, p = .05$)のみに負の関連がみられた。

考察

本研究は、制御焦点を操作することによって、集団内

で少数派となる個人の集団内での発言時間が変化するかどうかを検討した。その結果、条件間で少数派の発言時間、総発言時間に対する発言時間割合、結論決定時間に対する発言時間割合のいずれの変数についても、制御焦点の違いによる有意な差はみられず、仮説は支持されなかった。

仮説が支持されなかった理由として、まず、発言内容の問題が考えられる。本研究では、制御焦点を操作することによって、自らの情報や意見を発言することに対するモードが変化し、それによって発言量に差がみられると仮説を立てた。しかし、発言は自らの情報や意見のみで構成されるものではなく、他者への相槌や同調、他者の意見の繰り返しなども含むものである。そのため、制御焦点の操作によって自らの意見の発言に対するモードが変化した場合であっても、全体の発言量には差がみられなかった可能性がある。

さらに、制御焦点の操作以上に、個人のコミュニケーション・スキルやパーソナリティ特性が、発言量に強く影響した可能性考えられる。先行研究では、外向性が高い話者ほど、話題を積極的に提供し、会話をまとめていく上で中心的な役割を果たすことが明らかとなっている(藤本・大坊, 2007b)ことから、こうしたパーソナリティ特性が発言に影響した可能性が考えられる。加えて、実験課題に関連する経験の個人差も、発言に影響を与えた可能性がある。本研究では、スポーツ店の経営という実験課題を用いたため、スポーツ経験のある参加者が集団内にいた場合、他の参加者がその個人の意見を聞こうとする姿勢が高まった可能性がある。本研究では、制御焦点を操作することで、コミュニケーション・スキルやパーソナリティ特性に関わらず、発言に影響するという仮説を立てた。しかし、得られた結果は、制御焦点よりもむしろ個人特性が発言量に強い影響を与えていた可能性を示唆する。

さらに、利益の設定が適切ではなかった可能性も考えられる。本研究では、集団討議課題で正答に到達することを利益として設定していた。しかし、課題での正答を参加者が自らの利益として認識していたかについて、事後的な確認を行わなかった。本研究の実験状況では、正解を利益として認識しない場合、他の利益を追求することが難しかったと考えられる。そのため、正答を利益として認識しなかった場合、促進焦点をプライミングした場合でも積極的な発言が促されなかった可能性がある。さらに、損失の設定も明確ではなく、参加者が集団討議場面での損失を認識していたのかどうかを判断することができなかった。損失が認識されていない場合には、予防焦点をプライミングした場合でも沈黙といった、防衛的な行動が促されなかった可能性がある。今後は、集団討議場面において、集団成員が何を利益と損失として認識しているの

かを確認した上で、適切な実験場面の設定を行う必要がある。

また、変数間の相関係数を算出したところ、促進焦点3名条件の少数派(促進焦点)については、特性的予防焦点と神経症傾向が発言時間と正の関連を示し、促進焦点2名予防焦点1名条件の少数派(予防焦点)では自己主張が発言時間と正の関連を示した。いずれの条件においても、特性的促進焦点は発言時間には影響せず、促進焦点条件においては特性的予防焦点の高さと発言時間の関連が示された。特性的予防焦点が高い個人は、さまざまな場面において間違いを犯さないことを目指して行動すると考えられる。集団討議場面においては、発言内容の不一致や間違いが避けるべき事態として考えられる。このとき、沈黙だけでなく、積極的な相槌や同調といった反応もこうした事態を避けるための行動として考えられる。本研究では、特性的予防焦点の高い個人に促進焦点をプライミングしたことによって、行動パターンが予防焦点に合致しながらもより積極的に間違いを回避する行動に移行した可能性が考えられる。

また、促進焦点3名条件において、神経症傾向の高さと発言時間の間にも正の関連がみられた。このことは、不安を感じやすい神経症傾向の高い個人が、ネガティブな評価を避けるために発言をした可能性を示すものである。その一方で、少数派全体での変数間の相関係数を確認したところ、特性的制御焦点と発言の間に関連はみられなかった。この点については、サンプルの偏りの可能性も考慮し、より検討を重ねる必要がある。

最後に、本研究の問題点について述べる。本研究では、自らの意見が集団内で少数派であることで生じる孤立に対する懸念によって発言が抑制されると考え、実験を行った。しかし、本研究で採用した隠れたプロフィール課題では、実験者から与えられた情報を共有することが集団討議における主要な目的となっていた。また、実験者から与えられた情報は、事実としての正しい情報であり、参加者自身の意見を反映するものではなかった。そのため、少数派であったとしても、情報を共有することに懸念を感じることは少なく、必ずしも発言をしにくい状況ではなかった可能性が考えられる。

さらに、本研究では参加者に付与した情報の記憶状況を確認しなかったため、参加者の発言の有無が意図的なものなのか、覚えていなかったための非意図的なものかを判別することができない。今後は、参加者の情報の記憶状況も確認したうえで、検討を行う必要がある。

これらの点に加えて、本研究は参加者数が非常に少ないという問題がある。そのため、本研究で得られた結果についての解釈には慎重になる必要がある。これまでに挙げた問題点を改善した上で、制御焦点が集団討議場面における沈黙に影響する可能性については、参加者の個人特性も考慮したうえで検討を行うことが望まれる。

Table4 条件別の少数派の変数間相関係数(促進焦点3名条件: $n=10$, 促進焦点2名予防焦点1名条件: $n=10$)

予防焦点条件	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
促進焦点条件												
a. 特性的促進焦点		.65 *	.37	-.10	.05	.94 ***	.07	-.25	-.47	.02	-.38	-.12
b. 特性的予防焦点	-.06		.58	-.24	.03	.62	.11	-.46	-.46	.03	-.20	-.15
c. 表現力	.60	-.18		.06	.17	.30	.34	-.31	-.14	-.21	-.41	-.22
d. 自己主張	.68 *	-.43	.63		-.02	-.37	-.44	.14	.64 *	.51	.37	.69 *
e. 外向性	-.06	-.13	.21	.34		-.05	.31	0	-.38	-.22	-.29	.03
f. 調和性	.15	-.60	.19	.54	-.28		.21	-.15	-.58	-.17	-.48	-.35
g. 勤勉性	.13	-.82 **	.42	.50	.19	.43		.19	-.17	-.19	-.09	-.11
h. 神経症傾向	.39	.78 **	.33	-.12	-.12	-.52	-.55		-.03	-.27	-.11	-.04
i. 開放性	.25	.22	.07	.27	.46	-.29	-.30	.21		.62	.74 *	.69 *
j. 発言時間	.37	.73 *	-.05	-.26	-.35	-.43	-.73 *	.77 **	.01		.86 **	.84 **
k. 発言時間割合(対総発言時間)	.38	.79 **	.17	-.03	-.43	-.15	-.54	.81 **	-.03	.78 **		.84 **
l. 発言時間割合(対総討議時間)	.17	.81 **	.03	-.03	-.15	-.22	-.53	.67 *	-.07	.69 *	.90 ***	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table5 全体での変数間相関係数($n = 20$)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
a. 特性的促進焦点												
b. 特性的予防焦点	.32											
c. 表現力	.48 *	.15										
d. 自己主張	.21	-.33	.34									
e. 外向性	.03	-.02	.17	.05								
f. 調和性	.64 **	.09	.24	.01	-.12							
g. 勤勉性	.11	-.47 *	.39	.10	.23	.30						
h. 神経症傾向	.07	.16	.05	-.08	.02	-.29	-.19					
i. 開放性	-.22	-.15	-.05	.53 *	-.19	-.43	-.25	-.08				
j. 発言時間	.20	.38	-.11	.05	-.20	-.27	-.45 *	.31	.21			
k. 発言時間割合(対総発言時間)	-.07	.23	-.12	.16	-.30	-.37	-.30	.29	.38	.81 ***		
l. 発言時間割合(対総討議時間)	-.01	.26	-.10	.39	-.03	-.30	-.31	.22	.40	.73 ***	.85 ***	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

引用文献

- 荒川歩・鈴木直人 (2004). しぐさと感情の関係の探索的研究 感情心理学研究, 10, 56-64.
- Carver, C. S., Antonio, M., & Scheier, M. F. (1985). Self-consciousness and self-assessment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 117-124.
- Freitas, A. L., Liberman, N., & Higgins, E. T. (2002). Regulatory fit and resisting temptation during goal pursuit. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 291-298.
- Friedman, R. S., & Förster, J. (2001). The effects of promotion and prevention cues on creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1001-1013.
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007a). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007b). 小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発言行動傾向の影響 実験社会心理学研究, 47, 51-60.
- Greitemeyer, T., Schulz-Hardt, S., Brodbeck, F. C., & Frey, D. (2006). Information sampling and group decision making: the effects of an advocacy decision procedure and task experience. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, 12, 31-42.
- Henriksen, K. & Dayton, E. (2006). Organizational silence and hidden threats to patient safety. *Health Services Research*, 41, 1539-1554.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.

- Molden, D. C. & Higgins, E. T. (2004). Categorization under uncertainty: Resolving vagueness and ambiguity with eager versus vigilant strategies. *Social Cognition*, 22, 248-277.
- Morrison, E. W. & Milliken, F. (2000). Organizational silence: A barrier to change and development in a pluralistic world. *Academy of Management Review*, 25, 706-725.
- Moskal, B. S. (1991). Is industry ready for adult relationships? *Industry Weeks*, 240, 18-25.
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- 尾崎 由佳・唐沢 かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討— 心理学研究, 82, 450-458.
- Phillips, K. W. (2003). The effects of categorically based expectations on minority influence: The importance of congruence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 3-13.

註

本研究は、平成 26 年度に第一著者が名古屋大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。執筆にあたりご助言いただきました、佐藤有紀氏(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)に深く感謝いたします。

Appendix 隠れたプロフィール課題で使用した各店舗の情報

	店舗A	店舗B	店舗C
ポジティブ	<p>従業員の入れ替わりがほとんどない。 高価格帯での販売競争力がある。 店舗の拡大・改装が可能である。 周辺に競合する店舗がない。</p> <p>駐車場が十分にある。</p> <p>しっかりとした評判のある警備保障サービスと契約をしている。 価格が安いと評判である。 人通りの多い地域にある。 バスと鉄道へのアクセスが良い。</p>	<p>職場の雰囲気がいい。 商品の質が良いと評判である。 バス停からのアクセスが良い。 もともと近い競合店とは十分離れている。 系列店からの干渉が少ない。</p> <p>投資コンサルタントは、店舗の状況をとても好意的に評価をしている。</p>	<p>交通機関へのアクセスが良い。 ショーウィンドウが大きい。 配達車用の通用口があり、配達が楽である。 サービスが良いと評判である。 客層の中心は、金銭的に余裕のある人々である。 店舗の設備や物品は、そのまま使用することができる。</p>
中立的	<p>となりにパン屋がある。 店舗は11年前からある。 全従業員: マネージャー2人、従業員10人</p>	<p>全従業員: マネージャー2人、従業員12人 店舗は12年前からある。 となりに衣料品店がある。</p>	<p>客の要望はありきたりなものである。 全従業員: マネージャー2人、従業員11人 となりに文房具屋がある。 店舗は10年前からある。 職場の雰囲気は良くも悪くもない。 6か月後に店舗の権利を引き継げる。</p>
ネガティブ	<p>警備保障サービスの保険料が高い。 ボイ捨ての多い通りが近くにある。 展示スペースを分割し直さなければならない。</p>	<p>マネージャーが未熟である。 耐震工事が必要なため、費用がかさむ。 展示スペースを分割することが難しい。 駐車場がない。 窓が開かず、エアコンでしか換気ができない。 とても暗い。</p>	<p>すでに近くにスポーツ店がある。 従業員の入れ替わりが激しい。 トイレを新しくしなければならない。</p>

The effect of individual regulatory focus on in-group silence

Konomi TARUI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Tasuku IGARASHI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

This study investigated psychological factors that decrease in-group silence. Silence is regarded as behaving passively or doing nothing to influence group decision making in a group, and lead by in-group pressure, threats of getting negative feedback, and *status quo*. Based on the regulatory focus theory, this study used a hidden profile task in a group with three members and predicted that a minority member in the group primed with prevention focus is likely to speak shorter than those with promotion focus. Results showed that no significant differences were found between promotion focus and prevention focus priming. On the other hand, trait prevention focus of the minorities increased an illocutionally act in the promotion-focused condition. Implication of the result interpreted by the impact of activated motivation on the avoidance of criticism for passive involvements in group tasks among people with chronic prevention focus.

Keywords: silence, regulatory focus, utterance.